

# 日本語と英語における「目的語」の表現形式の比較の試み (1)

小 川 明

1. 本論では、動詞の示す動作の対象である「目的語」が、日本語と英語において、それぞれどのような形式で表現されるのか調べて、このふたつの言語の間にどのような表現上の差異が見られるのか、比較してみたい。

このような「対象」の表現形式の比較の試みは、寺村 (1992: 199-202) に見られる。彼は動詞がどんな「補いのことば」を必要とするかという角度から、たくさんの動詞を日本語について観察すると、いくつかの類が浮かんでくると予測する。たとえば、

## (1) a. タイプA

意味的類型：他者に直接働きかけ、それに影響を及ぼすような動作

表面構造：日本語：N1 ガ N2 ヲ V

(コウス、押ス、ナグル、コロス……)

英 語：N1 V N2

(break, push, bear [原文のまま], kill……)

## b. タイプB

意味的類型：二者の共同動作、二者の存在が前提となるような動作  
・できごと

表面構造：日本語：N1 ガ N2 ト V

N1 ト N2 ガ V

(衝突スル、競争スル、マザル……)

英 語：N1 V with N2

N1 and N2 V

(collide, compete, mix……)

しかしながら、彼によれば、日本語と英語で同じ意味的類型に属するにもかかわらず、表面構造で対応していないことがある。以下の例は、同じような意味を持つ、つまりおなじ意味的類型に属する動詞にもかかわらず、日本語と英語では異なった表面構造を持つことがあることを示す。( )内は表面構造のタイプを示す。たとえば「結婚する」と marry は同じ意味的類型タイプBに属するにもかかわらず、表面構造は「結婚スル」はタイプB、marry はタイプAである。対応する動詞の( )内の食違いに注目してください。

- (2) a. N ト 結婚する (タイプB)                      marry N (タイプA)  
       b. N ト 会う (タイプB)                              meet N (タイプA)  
       c. N ニ 触レル (タイプA、Bに非ず) touch N (タイプA)

これから予想されることは、英語国民が日本語を話す時に「～ヲ結婚する」という可能性があること、寺村(1992:201-202)はいう。

従来、日英語比較ではこのような事実は多く指摘されてきたが「表現」とか「発想」の違いとして説明されてきた。しかし寺村は、これは、「文法」の問題であると考え、本稿でも文法の問題としてもう少し組織的に扱う。

2. しかし比較をする前に、日本語と英語のそれぞれの対象表現の形式を別々に詳しく調べる必要があるだろう。比較を前提にしないで、まずふたつの言語を切り離して分析をする必要がある。そうしないと片方の言語の眼鏡をかけて他方の言語をつい見えてしまうことになるであろう。これはなかなか避けることが難しいが、安易に同一と考えないことが大切と思う。湯川(1999:4)は、言語における「普遍性」という言い方は、「文」とか「音素」のような抽象的なレベルでなく、具体的なレベルでは、「(異言語間の)の類似性」という言い方をすべきであると述べる。「一つの言語の中に認められるある事柄と別の言語の中に認められる似たような事柄を「同じ」でありうる」と考えると、「ある言語の事柄を別の言語の枠組みで解釈する(もっと端的にいえば、別の言語の枠組みを押しつける)」誤りの危険性があるから

である。これとは少しも矛盾しないで両立するが、山中（1998：261）のいうこともまた事実である。自分のことばにその独自性を見いだす一方「最初どんなに違って見える二言語も、深く見てゆくと次第に同じところが目につくという現象がある。たとえば英語など、習いはじめたころは日本語を逆さまにしたことばのようにも映るが、習熟するにつれて、これほど遠い二つの言語があまりに似ていることにかえって奇異の感さえ抱くだろう。」ここでやって見たいことは、日本語と英語のほぼ同じ領域を別々に調べてみて、その後どのくらい類似点と差異があるのか明確にすることである。

### 3. 最初に日本語について検討する。やはり寺村（1992：267）を出発点としてみよう。

……現在の学校文法でのように「自動詞・他動詞」の別が何に基づくのか一向にはっきりしないままでは、日本人を対象とする場合でも有意義な情報とは思われない。特に外国人にとっては必要なのは、「動作・作用が他に及んで、それに対する働きかけを表す」動詞のうち、どういう種類のものが「父ヲ養ウ」のように「～ヲ～スル」となり、どういうものが「父ニ反抗スル」のように「～ニ～スル」となり、またどういうものが「父と喧嘩する」のように「～ト～スル」のような形をとるのかについての情報である。

それでは、これらの動詞の対象をあらわす名詞が「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」のどの形をとるかは、どんな基準で選択されるのであろうか。寺村は、動作の対象の中にたとえば「(動作)の客体」、「(目ざす)相手」、「(相互動作の)片方」の3つのタイプがあり、それぞれ「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」に対応すると考える。このような基準をたてると、「養ウ」、「抱ク」、「育テル」、(1a)の日本語の動詞などが「～ヲ」、「反抗スル」、「カミック」、「賛成スル」が「～ニ」、「喧嘩スル」、「仲直リスル」や(1b)の日本語の動詞が「～ト」をと

ることが説明できることになる。

寺村の説明において注目すべきことは、どの格助詞をとるかが意味的な基準にもとづいていることと、その選択が日本人が主体と対象の関係を違ったものとして捉えていることの反映であると見做していることの、ふたつである。

4. さらに多くの動詞を対象にした場合、上で述べた寺村の意味の基準で説明ができるのか調べてみよう。その際『日本語基本動詞用法辞典』を主として利用することにする。この辞典は、動詞がどのような助詞をとるかについての情報を「文型」の説明のなかに含んでいる。この辞典を利用し、また必要に応じて補いながらリストを作ってみる。どの動詞を取り上げるかは、大体の目安を次の基準におく。

- (i) 他動詞・自動詞という区別には頼らない。山中(1998:46)は「日本語の場合には、助詞支配のパターンによって動詞を分類するのがもっとも適切であり、自他の区別はこれを前提とした二次的な範疇として取り上げられるべきものである。」と述べる。
- (ii) 動詞がとる主語以外の必要不可欠と思われる第一要素を問題にする。その中には、いわゆる動詞の「目的語」とは思えないようなものも入ることになるであろう。しかしここでは、やや機械的に最初やってみて後でそれらについては考えてみたい。そしてその必要不可欠と思われる要素が伴う助詞をとりあげる。たとえば、次の下線部を問題にする。

- (3) a.    ~ガ   ~ヲ 殺ス
- b.    ~ガ   ~ニ 負ケル
- c.    ~ガ   ~ニ アル
- d.    ~ガ   ~ニ 驚ク
- e.    ~ガ   ~ヲ ~ニ ヤル
- f.    ~ガ   ~ヲ ~ニ 代エル

(e)と(f)において「~ヲ」と「~ニ」のどちらを第一要素とするかを

決める時は、「対象」と「相手」であつたら「対象」の方をとることにする。まず「対象」を示す要素を優先する。

以上を条件としてまずリストを作り、必要に応じて修正していくことにする。

#### (4) 「～ヲ」をとる動詞

- a. 愛スル、諦メル、開ケル、上ゲル、預カル、預ケル、与エル、暖メル、扱ウ、集メル、洗ウ、改メル、案内スル、生カス、頂ク、痛メル、祈ル、意味スル、祝ウ、植エル、浮ベル、受ケ取ル、動カス、失ウ、歌ウ、疑ウ、奪ウ、生ム、売ル、運転スル、選ブ、遠慮スル、終エル、置ク、送ル、怒ル、押ス、落トス、覚エル、思イ出ス、解釈スル、買ウ、書ク、隠ス、囲ム、飾ル、語ル、我慢スル、借リル、乾カス、考エル、歓迎スル、完成スル、記憶スル、聞ク、着セル、希望スル、許可スル、嫌ウ、切ル、着ル、禁止スル、配ル、繰リ返ス、計画スル、経験スル、消ス、決心スル、欠席スル、研究スル、検査スル、建設スル、見物スル、後悔スル、試ミル、断ル、殺ス、壊ス、避ケル、下ゲル、指ス、誘ウ、叱ル、試験スル、沈メル、実現スル、実行スル、指導スル、支配スル、閉メル、修理スル、受験スル、主張スル、準備スル、使用スル、招待スル、知ラセル、調べル、知ル、信仰スル、信ジル、心配スル、吸ウ、進メル、捨テル、整理スル、責メル、攻メル、選択スル、掃除スル、想像スル、育テル、尊敬スル、倒ス、炊ク、抱ク、確カメル、助ケル、訪ネル、叩ク、建テル、楽シム、食ベル、試ス、注文スル、使ウ、捕マエル、掴ム、突ク、作ル、都合スル、伝エル、続ケル、包ム、潰ス、訂正スル、手伝ウ、届ケル、止メル、取ル、直ス、眺メル、無クス、殴ル、投ゲル、習ウ、並ベル、逃ガス、握ル、憎ム、煮ル、脱グ、盗ム、塗ル、願ウ、残ス、望ム、述ベル、飲ム、計ル、穿ク、始メル、

発見スル、発明スル、生ヤス、貼ル、引ク、否定スル、開ク、拾ウ、拭ク、防グ、踏ム、勉強スル、報告スル、干ス、掘ル、曲ゲル、間違エル、待ツ、招ク、守ル、磨ク、見ル、迎エル、用イル、持ツ、燃ヤス、貰ウ、止メル、譲ル、輸入スル、許ス、用意スル、要求スル、汚ス、止ス、予想スル、予定スル、喜ブ、理解スル、利用スル、練習スル、沸カス、忘レル、割ル

b. 歩ク、行ク、越エル、通過スル、通ル、這ウ、走ル、渡ル

(いわゆる「経路」の「～ヲ」)

c. 降リル、出航スル、出発スル、退ク、卒業スル、脱落スル、出ル、遠ザカル、免レル、外レル、離レル

(いわゆる「出発点」の「～ヲ」、「～カラ」と交換可能)

(5) 「～ニ」をとる動詞(いくつかの類に仮に分けてみる。( )の中にその基準を示してある)。

a. 及ブ、帰国スル、刺サル、就職スル、出席スル、住ム、座ル、近付ク、近寄ル、通学スル、付ク、着ク、到着スル、入学スル、臨ム、乗ル、入ル、引ツ越ス、向カウ、寄ル、留学スル

(到達する場所)

b. 当タル、影響スル、協力スル、加ワル、決定スル、答エル、応エル、参加スル、従ウ、添ウ、就ク、伝ワル、電話スル、同情スル、慣レル、馴レル、乗ル、反対スル

(行為の向かう対象)

c. 一致スル、挨拶スル、合ウ、会ウ、重ナル、関係スル、親シム、相談スル、対立スル、繋ガル、並ブ、似ル、比例スル、ブツカル、触

レル、混ザル、交ザル、分カレル、別レル

(行為の向かう対象、「～ト」と交換可能)

d. 変ワル、ナル、変化スル (到達する結果)

e. 期待スル、悲シム、耐エル、タメラウ  
(「～に対して」という意味で、やや意味が変わるが  
「～ヲ」と交換可能)

f. 劣ル、勝ツ、負ケル、勝ル (相手)

g. 欠ケル、成功スル、間ニ合ウ (どんな点でか)

h. アル、イル (場所)

i. 飽キル、呆レル、慌テル、安心スル、驚ク、ガツカリスル、感心スル、傷ツク、苦シム、苦勞スル、悩ム、満足スル、迷惑スル、酔ウ  
(感情の原因・理由を示し「～デ」と交換可能)

j. 濡レル、マミレル (原因・理由を示し「～デ」と交換可能)

(6) 「～ト」をとる動詞

握手スル、争ウ、競争スル、結婚スル、交際スル、異ナル、戦ウ、違ウ、ブツカル

5. まずこのリストについての大雑把な観察をまとめてみよう。

(1) 日本語の対象の表現形式はきわめて簡単である。基本的には「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」の3種類である。

- (2) 「～ヲ」が圧倒的に多く、「～ト」はわずかである。
- (3) 「～ヲ」はもちろんであるが、「～ニ」のなかにもいろいろな種類のものが入っている。
- (4) 寺村の意味に基づく基準である「～ヲ」は「動作の客体」、「～ニ」は「めざす相手」、「～ト」は「相互動作の片方」は基本的に正しいと思われる。

「～ヲ」が圧倒的に多いことは、必然的に「～ヲ」がいろいろな種類の対象を表現することになるので、「～ヲ」を細かく分類していくことは、難しく困難であろう。国広(1967:223)は、「ヲ」の本質的意味を「《動作・作用の対象を示す》の1つだけを仮定すれば十分である」と捉えている。それをふまえて、山田(1981:70)は、「ヲ」自体に「経路」ないし「出発点」という意味特徴が含まれていることは妥当でないと見做し、「ヲ」が「行為の及ぶ範囲」を示すと規定している。田中茂範(1997:30)も国広・山田の方針に基本的にしがたい「～ヲ」は〈～を動作が作用する対象として取り立てよ〉という意味づけの仕方の要請を行なう助詞であると見做す。

また湯川(1999:144-146)は、助詞の「ヲ」が表す事象は、次の例において切れ目なく連続していて、区切れないことを指摘している。

- (7) a. 服ヲ着ル  
 b. コノ道ヲ行ク  
 c. 川ヲ渡ル  
 d. 白線ヲ越エル  
 e. 垣根ヲ飛び越ス

この「～ヲ」の多様性の問題は後でもう一度検討する。また「～ニ」についても動詞がとる第一要素を機械的に考慮したので、いわゆる「対象」とは思えないものまでリストにあげてある。これについても後で考えることにする。

6. 次に英語の動詞の行為の対象の表現形式をここで簡単に示しておこう。

英語においては、まず前置詞を取らないものと、任意のものと、取らなくてはならないものと大きく三種類に分類される。

- (8) a. He broke the teapot.  
b. He heated the cold meat.  
c. Mary dug a hole in the garden.  
d. They built a small house.  
e. He moved the chair a little.  
f. Railways and ships carry goods.
- (9) a. He attended (at) the funeral.  
b. I clutched (at) the child's hand.  
c. Japan fought (against) the US in World War II.  
d. He met (with) the president of the university.
- (10) a. I apologized to him for being so rude.  
b. We object to the proposed new airport.  
c. He will not respond to such a question.  
d. I was speaking to him about my plan.

注目すべきことは、(9)–(10)のように前置詞を取る場合、その種類がさまざまあることである。

- (11) argue (about), rub (against), fight (against), aim at, kick (at), pass (by), abide by, ask for, hope for, depart (from), refrain from, delight in, rejoice in, penetrate (into), investigate (into), assault (on), intrude on, jump (over), quarrel over, turn (round), permeate (through), pierce (through), attach to, apologize to, incline toward, lean toward, collide with, agree with

それでは、英語においては、どんな原理によって、(8)–(10)のように前置詞を取るものと取らないものに分類されるのか、またある動詞が特定の前置詞を取るのは何によって決められるのか。細かいことは、小川(1999)を参照して頂きたいが、簡単に述べてみる。動詞の示す行為によって目的語が受け

るインパクトが大きいと一般に前置詞をとらない。(8a)–(8b)では目的語の状態変化が引き起こされ、(8c)–(8d)では目的語が新しく造り出され、(8e)–(8f)では目的語の位置変化が引き起こされていて、動詞の行為により目的語の受ける影響は大きい。それに対して(9)–(10)のように目的語が動詞の行為の相手や対象を示している場合は、目的語は動詞の行為によって影響をあまり受けない。目的語に状態変化が起こるわけではないし、目的語が新しく造り出されるのでもないし、位置の変化が起こるわけでもない。その時、動詞は、一般に前置詞を取る。事実は、小川(1999)で論じたようにもう少し複雑であるがここではとりあえずこれで済ませておくことにする。議論をしていく上で必要になった時、この点に戻る。

次に、動詞の派生名詞がとる前置詞について考えてみる。(8)のように目的語が強くインパクトを受けて、前置詞を伴わない動詞の派生名詞は常に of を伴う。

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| (12) a. destroy | destruction of    |
| b. construct    | construction of   |
| c. create       | creation of       |
| d. convey       | conveyance of     |
| e. transport    | transportation of |

それに対して(9)–(10)の派生名詞は、動詞と同一の前置詞を伴う。

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| (13) a. attend (at) | attendance at |
| b. meet (with)      | meeting with  |
| c. apologize to     | apology to    |
| d. object to        | objection to  |
| e. respond to       | response to   |

ところが(9)–(10)のような目的語が行為の相手や対象を示している動詞にもかかわらず、前置詞をとらない動詞が存在する。しかしこれらの動詞は、(8)の動詞と異なって、of 以外の前置詞をとる。派生名詞まで考慮すると前置詞をとらない動詞は2種類に分かれるのである。

- |                |                |
|----------------|----------------|
| (14) a. admire | admiration for |
| b. greet       | greeting to    |
| c. help        | help to        |
| d. need        | need for       |
| e. regret      | regret for     |

第二の問題、ある動詞は特定の前置詞をとるが、これもやはり意味が関与する。類似した意味を持つ動詞は同一の前置詞をとる。

- (15) (議論する) argue (about), debate (about), discuss [ただし派生は、discussion about], dispute (about)  
 (戦う) battle against, fight against, offend against, war against  
 (依存する) count on, depend on, hinge on, rely on  
 (くっつく・加わる) add to, adhere to, adjoin (to), attach to  
 (答える) answer [ただし派生名詞は、answer to], react to, reply to, respond to  
 (離れる) depart (from), desert, escape (from), flee (from), graduate (from), leave (from), retreat (from), withdraw from

7. まず大雑把な比較を試みてみよう。(8)–(10)における英語の動詞にほぼ対応すると思われる日本語の動詞が、どの助詞をとるかを見てみよう。

(8)の動詞はすべて「～ヲ」をとる。

壊ス、温メル、掘ル、建テル、動カス、運ブ

(9)–(10)の動詞は多くは「～ニ」で、「～ヲ」と「～ト」をとるものもある。

「～ニ」 出席スル、謝ル、反対スル、答エル、話ス

「～ヲ」 掴ム

「～ト」 戦ウ

「～ニ」と「～ト」 会ウ

これを見ると、前置詞をとらない英語の動詞は、日本語の「～ヲ」動詞にほぼ対応すると推測できる。前置詞をとる英語の動詞は「～ヲ」、「～ニ」、「～ト」のどれかに対応する。多分「～ニ」が多い可能性がある。「～ヲ」はどちらにも含まれているため、「～ヲ」の守備範囲はかなり広いということになろう。これは日本語において「～ヲ」動詞が圧倒的に多いことと関係している。

8. それでは細かく調べていくことにしよう。まず数が少ない(6)の「～ト」から始めることにする。結論を先に言えば、日本語の「～ト」動詞とほぼ同じ意味を持つ英語の動詞は、一般に with をとる。

- (16) 握手スル = shake hands with; 争ウ = dispute with, quarrel with;  
競争スル = compete with; 交際スル = associate with, mix with;  
交渉スル = negotiate with; 戦ウ = fight {against, with}; 話シ  
合ウ = consult with, talk with

日本語の「～ト」と同じように英語の with もまた「相互のはたらきかけ」を示すと思われる。with の基本的な意味は「共に (in the company of)」であり、このことから二者がかなり一致するのであろう。

ただし、異ナル = differ from; 違ウ = differ from, disagree with である。また結婚スル = marry, get married to であり、派生名詞は marriage {to, with} になる。

9. 次に「～ニ」と「～ト」の両方がとれる動詞について調べてみる。日本語では「～ニ」は一方的で、「～ト」は相互的であることがかなり明瞭に区別されている。このことは、次の例からよくわかる。

- (17) a. ～ト 話シ合ウ  
b. \*～ニ 話シ合ウ  
(18) a. \*～ト 話シ掛ケル  
b. ～ニ 話シ掛ケル

- (19) a. ～ト 交際スル  
 b. \*～ニ 交際スル

同じ動詞が「～ニ」と「～ト」の両方をとる場合でも「一方的」と「相互的」の差はかなり明瞭である。

- (20) a. ～ト 相談スル  
 b. ～ニ 相談スル
- (21) a. ?走ッテクル対向車ニ ブツカッタ  
 b. 走ッテクル対向車ト ブツカッタ
- (22) a. 停車中ノ車ニ ブツカッタ  
 b. ?停車中ノ車ト ブツカッタ

(20)では、お互いに意見を出しあうという状況では「～ト」を使い、意見を相手に聞くという場面では「～ニ」を使う。また私の判断では、(21)のように相互にぶつかる場合は「～ト」をとり、(22)のように一方的にぶつかる場合は「～ニ」が自然に思われる。

さて(5c)の「～ニ」と「～ト」の両方をとる日本語の動詞に対応する英語の動詞は、どんな前置詞をとるのであろうか。

- (23) 一致スル = agree with, accord with, coincide with; 挨拶スル = greet; 合う = fit, match, suit; 会ウ = encounter, meet (with); 重ナル = overlap with; 関係スル・結ビツク = connect {to, with}, relate {to, with}; 相談スル = consult (with); 対立スル = conflict with, be opposed to; 繋ガル = connect with, link with; 並ブ = stand next to; 似ル = resemble, be similar to; 等シイ (形容詞) = be equal {to, with まれ}, be identical {with, to}; 比例スル = be proportionate to; ブツカル・衝突スル = bump {against, into}, collide with, run {against, into}; 触レル (接触スル) = touch; 触レル (言及スル) = touch on, refer to; 混ザル = mix with, mingle with; 別レル = part from

まず気付くことは、英語ではかならずしも動詞ではなくて、形容詞で対応

していることである。このことはどんな問題を含むのであろうか。調べてみる価値があると思うが、ここでは保留にしておく。

前置詞を伴わない動詞の派生名詞や形容詞形についても調べると、次のようになる。

(24) a. greeting to, resemblance to

b. be fit for, match for, be suitable for

ほとんどの場合 with か to を伴い、少数 from, for, on をとる。

以上、日本語と英語の「目的語」の形式の比較をはじめたが、この続きは次の機会にすることにする。

#### 参考文献

- 小川 明 (1999) 「動詞に伴う前置詞——意味から見た統語現象」 稲田俊明・岩部浩三・大庭幸男・水光雅則・武本雅嗣・西村秀夫編『言語研究の潮流』83-96, 開拓社.
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論』三省堂.
- 小泉 保・舟城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』359-454, 岩波書店.
- 田中茂範・松本 曜 (1997) 『空間と移動の表現』日英語比較選書 6, 研究社出版.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅱ 言語学・日本語教育編』くろしお出版.
- 山田 進 (1981) 「機能語の意味の比較」国広哲弥編『日英語比較講座第 3 巻 意味と語彙』53-99, 大修館書店.
- 山中桂一 (1998) 『日本語の形』東京大学出版会.
- 湯川恭敏 (1999) 『言語学』ひつじ書房.